

前

入 学 試 験 問 題  
国 語 (文科)

(配点一二〇点)

平成二十九年二月二十五日 九時三〇分～一二時

注 意 事 項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で二十ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があつたら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号(表面一箇所、裏面一箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 十、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。



草  
稿  
用  
紙

(切り離さないで用いよ。)

## 第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

与えられた困難を人間の力で解決しようとして営まれるテクノロジーには、問題を自ら作り出し、それをまた新たな技術の開発によつて解決しようとするというかたちで自己展開していく傾向が、本質的に宿つてゐるようには思われる。科学技術によつて産み落とされた環境破壊が、それを取り戻すために、新たな技術を要請するといった事例は、およそ枚挙にいとまないし、感染防止のためのワクチンに対してウイルスがタイセイ<sup>a</sup>を備えるようになり、新たな開発を強いるといつたことは、毎冬のよう耳にする話である。東日本大震災の直後稼働を停止した浜岡原発に対して、中部電力が海拔二二メートルの防波堤を築くことによつて、「安全審査」を受けようとしているというニュースに接したときも、同じ思いがリフレインするとともに、こうした展開にはたして終わりがあるのでだろうかという気がした。技術開発の展開が無限に続くとは、たしかにいい切れない。次のステージにが起ころのか、当の専門家自身が予測不可能なのだから、先のことは誰にも見えないというべきだろう。けれども科学技術の展開には、人間の営みでありながら、有無をいわせず人間をどこまでも牽引<sup>けんいん</sup>していく不気味なところがある。いつたいそれはなんであり、世界と人間とのどういった関係に由来するのだろうか。

医療技術の発展は、たとえば不妊という状態を、技術的克服の課題とみなし、人工受精という技術を開発してきた。その一つ体外授精の場合、受精卵着床の確率を上げるために、排卵誘発剤を用い複数の卵子を採取し受精させたうえで子宮内に戻す、といったことが行なわれてきたが、これによつて多胎妊娠の可能性も高くなつた。多胎妊娠は、母胎へのフィジカルな影響や出産後の経済的なことなど、さまざまな負担を患者に強いいるため、現在は子宮内に戻す受精卵の数を制限するようになつてゐる。だが、この制限によつても多胎の「リスク」は、自然妊娠の二倍と、なお完全にコントロールできたわけではないし、複数の受精卵からの選

択、また選択されなかつた「もの」の「処理」などの問題は、依然として残る。

いづれにせよ、いつした問題に關わる是非の判断は、技術そのものによつて解決できる次元には属していない。体外授精に比してより身近に起つてゐる延命措置の問題。たとえば胃瘻いろうなどは、マスクもとりあげ関心を惹くようになつたが、もはや自ら食事をとれなくなつた老人に対して、胃に穴を開けるまでしなくとも、鼻からチューブを通して直接栄養を胃に流し込むことは、かなり普通に行なわれてゐる。このような措置が、ほんのその一部でしかない延命に關する技術の進展は、以前なら死んでいたはずの人間の生命をキュウサイbし、多数の療養型医療施設を生み出すに到つてゐる。

しかしながら老齢の人間の生命をできるだけ長く引き伸ばすといふことは、可能性としては現代の医療技術から出でてくるが、現実化すべきかどうかとなると、その判断は別なカテゴリーに属す。「できる」ということが、そのまま「すべき」にならないのは、核爆弾の技術をもつゝとが、その使用を是認あくににならないのと一般である。テクニー(technik)である技術は、ドイツ語Kunstの語源が示す通り、「じあむる(können)」の世界に属すものであつて、「かくわう(sollen)」△だ区別されねばならない。

テクノロジーは、本質的に「一定の条件が与えられたときに、それに応じた結果が生ずる」という知識の集合体である。すなわち、「どうすればできるのか」についての知識、ハウ・トゥーの知識だといつてよい。それは、結果として出てくるものが望ましいかどうかに関する知識、それを統御する目的に関する知識ではないし、またそれとは無縁でなければならない。その限りのところでは、テクノロジーは、ニコートラルな道具だと、いえなくもない。ところが、いつして「すべき」とから離れてゐるところに、それが単なる道具としてニコートラルなものに留まりえない理由もある。

テクノロジーは、実行の可能性を示すところまで人間を導くだけで、そこに行行為者としての人間を放擲ほうりゆきするのであり、放擲された人間は、かつてはなしえなかつたがゆえに、問われる」ともなかつた問題に、しかも決断せざるをえない行行為者として直面する。

妊婦の血液検査によつて胎児の染色体異常を発見する技術には、そのまま妊娠を続けるべきか、中絶すべきかという判断の是非を決める」とはできないが、その技術と出会い行使した妊婦は、いづれかを選び取らざるをえない。いわゆる「新型出生前診断」が

二〇一三年四月に導入されて以来一年の間に、追加の羊水検査で異常が認められた妊婦の九七%が中絶を選んだという。

療養型医療施設における胃瘻や経管栄養が前提としている生命の可能な限りの延長は、否定しがたいものだし、それを入所条件として掲げる施設があることも、私自身経験して知っている。だが、飢えて死んでいく子供たちが世界に数えきれないほど存在している現実を前にするならば、自ら食事をとることができなくなつた老人の生命を、公的資金の投入まで行なつて維持していくことが、社会的正義にかなうかどうか、少なくとも私自身は躊躇なく判断することができない。

ここで判断のはずを問題にしようといふのでは、もちろんないし、選択的妊娠中絶の問題一つをとつてみても、最終的な決定基準があるなどとは思えない。むしろ肯定・否定を問わず、いかなる論理をもつてても、それを基礎づけるものが欠けている」と、そういう意味で実践的判断が虚構的なものでしかないことは明らかだと、私は考えている。

たとえば現世代の化石燃料の消費を将来世代への責任によって制限しようとする論理は、物語としては理解できるが、現在存在しないものに対する責任など、<sup>レスポンス</sup>応答の相手がいないという点で、想像力の産物でしかないといわざるをえない。同じ想像力を別方向に向ければ、そもそも人類の存続などといったことが、この生物種に宿る尊大な欲望でしかなく、人類が、他の生物種から天然痘や梅毒のように根絶を祈願されたとしても、かかる人種滅絶の野望は、人間がこれら<sup>おの</sup>の敵に対してもつてゐる憎悪と、本質的には寸分の違ひもないといふだろう。その他倫理的基準なるものを支えていふとされる概念、たとえば「個人の意思」や「社会的コンセンサス」などが、その美名にもかかわらず、虚構性をもつてゐることは、少しく考えてみれば明らかである。主体となる「個人」など、確固としたものであるはずがなく、その判断が、時と場合によつて、いかに動搖し変化するかは、誰しもが経験することであり、そもそも「個人の意思」を書面で残して「意思表明」とすること自体、かかる「意思」なるものの可変性をさまざまと表わしている。また「コンセンサス」づくりの「公聴会」なるものが権力関係の追認でしかないことは、私たち自身、いやというほど繰り返し経験していることではなかろうか。

だが、行為を導くものの虚構性の指摘が、それに従つてゐる人間の愚かさの摘発に留まるならば、それはほとんど意味もないことだろう。虚構とは、むしろ人間の行為、いや生全体に不可避的に関わるものである。人間は、虚構とともに生きる、あるいは虚

構を紡ぎ出すことによって己れを支えているといつてもよい。問題は、テクノロジーの発展において、虚構のあり方が大きく変わつたところにある。テクノロジーは、それまでできなかつたことを可能にすることによつて、人間が従来それに即して自らを律してきた虚構、しかもその虚構性が気づかれなかつた虚構、すなわち神話を無効にさせ、もしくは変質をヨギなくさせた。それは、不可能であるがゆえにまったく判断の必要がなかつた事態、「自然」に任せることができた状況を人為の範囲に落とし込み、これに呼応する新たな虚構の産出を強いるようになつたのである。そういう意味でテクノロジーは、人間的生のあり方を、その根本のところから変えてしまう。

(伊藤徹『芸術家たちの精神史』一部省略)

〔注〕

- 排卵誘発剤——卵巣からの排卵を促進する薬。
- 多胎妊娠——一人以上の子供を同時に妊娠すること。
- 胃瘻——腹壁を切開して胃内に管を通じ、食物や水、薬などを流入させる処置。

(一) 「科学技術の展開には、人間の営みでありながら、有無をいわせず人間をどこまでも牽引していく不気味なところがある」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

(二) 「單なる道具としてユートラルなものに留まりえない理由」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

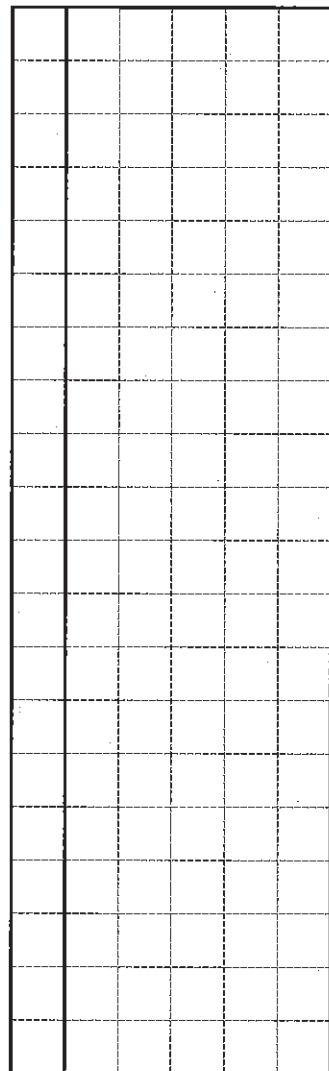
(三) 「実践的判断が虚構的なものでしかないことは明らかだ」(傍線部ウ)とあるが、なぜそういうえるのか、説明せよ。

(四) 「テクノロジーは、人間的生のあり方を、その根本どころから変えてしまう」(傍線部エ)とはどういうことか、本文全体の論旨を踏まえた上で、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。

(五) 傍線部a・b・cのかたかなに相当する漢字を楷書で書け。

a タイセイ b キュウサイ c ヨギ

草稿用



## 第一問

次の文章は、『源氏物語』真木柱巻の一節である。玉鬘は、光源氏(大殿)のかつての愛人であつた亡き夕顔と内大臣との娘だが、両親と別れて筑紫国で育つた。玉鬘は、光源氏の娘として引き取られ多くの貴公子達の求婚を受けるかたわら、光源氏にも思慕の情を寄せられ困惑する。しかし意外にも、求婚者の中でも無粋な鬚黒大将の妻となつて、その邸に引き取られてしまつた。以下は、光源氏が結婚後の玉鬘に手紙を贈る場面である。これを読んで、後の設間に答えよ。

二月にもなりぬ。大殿は、さてもつれなきわざなりや、いとかう際々しうとしも思はでたゆめられたる妬<sup>うら</sup>さを、人わろく、すべて御心にかからぬをりなく、恋しう思ひ出でられたまふ。宿世などいふものおろかならぬことなれど、わがあまりなる心にて、かく人やりならぬものは思ふぞかしと起き臥し面影にぞ見えたまふ。大将の、をかしやかにわららかなる気もなき人に添ひゐたらむに、はかなき戯<sup>たゞ</sup>れ言もつづましうあいなく思<sup>おほ</sup>されて、念じたまふを、雨いたう降りていとのどやかなるころ、かやうのつれづれも紛らはし所に渡りたまひて、語らひたまひしさまなどの、いみじう恋しければ、御文奉りたまふ。右近がもとに忍びて遣はすも、かつは思はむことを思すに、何ごともえつけたまはで、ただ思はせたることどもぞありける。

「かきたれてのどけぎ」るの春雨にふるさと人をいかにしのぶや

つれづれに添へても、恨めしう思ひ出でらること多うはべるを、いかでかは聞こゆべからむ」などあり。

隙に忍びて見せたてまつれば、うち泣きて、わが心にもほご経るままで思ひ出でられたまふ御さまを、まほに、「恋しや、いかで見たてまつらむ」などはえのたまはぬ親にて、げに、いかでかは対面もあらむとあはれなり。時々むつかしかりし御<sup>け</sup>色<sup>いろ</sup>を、心づきなう思ひきこえしなどは、この人にも知らせたまはぬことなれば、心ひとつに思しつづくれど、右近はほの氣色見けり。いかなりけることならむとは、今に心得がたく思ひける。御返り、「聞こゆるも恥づかしけれど、おぼつかなくやは」とて書きたまふ。

「ながめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人をしのばざらめ オ

力

ほじるころは、げに」となるつれづれもまさりはべりけり。あなかしことるやるやしく書きなしたまへり。

ひきひろげて、玉水のこぼるやうに思さるるを、人も見ぱうたてあるべしとつれなくもてなししたまへど、胸に満つ心地して、かの昔の、尚侍のかむ君を朱雀院の后の切にとり籠めたまひしをりなど思し出づれど、さし当たりたることなればにや、これは世づかずぞあはれなりける。好いたる人は、心からやすかるまじきわざなりけり、今は何につけてか心をも乱らまし、似げなき恋のつまなりや、とさましわびたまひて、御琴搔き鳴らして、なつかしう彈きなしたまひし爪音思ひ出でられたまふ。

〔注〕

○つれなきわざ——鬚黒が玉鬘を、光源氏に無断で自分の邸に引き取つたこと。

○紛らはし所——光源氏が立ち寄つていた玉鬘の居所。

○右近——亡き夕顔の女房。玉鬘を光源氏の邸に連れてきた。

○隙に忍びて——鬚黒が不在の折にこつそりと。

○うたかた——泡がはかなく消えるような少しの間も。

○尚侍の君を朱雀院の后の切にとり籠めたまひしをり——当時の尚侍の君であつた臘月夜を、朱雀院の母后である弘徽おほひづきよ殿でん大后が強引に光源氏に逢えないようになさつた時のこと。現在の尚侍の君は、玉鬘。

- (一) 傍線部ア・イ・オを現代語訳せよ。
- (二) 「げに、いかでかは対面もあらむとあはれなり」(傍線部ウ)とは誰のどのような気持ちか、説明せよ。
- (三) 「いかなりけることならむ」(傍線部エ)とは、誰が何についてどのように思っているのか、説明せよ。
- (四) 「るやるやしく書きなしたまへり」(傍線部カ)とあるが、誰がどのようにしたのか、説明せよ。
- (五) 「好いたる人」(傍線部キ)とは、ここではどういう人のことか、説明せよ。

草  
稿  
用  
紙

(切り離さないで用いよ。)

### 第三問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

齊奄家畜一猫自奇之号於人曰虎貓。客說之曰「虎誠猛」<sup>a</sup>  
 不如龍之神也。請更名曰「龍貓」。又客說之曰「龍固神於  
 虎也。龍昇天須浮雲、雲其尚於龍乎。不如名曰雲」<sup>b</sup>。又客說之曰「雲固不敵風也。請更名曰風」<sup>c</sup>。  
 曰、「雲蔽天、風倏散之。雲固不敵風也。請更名曰風」<sup>d</sup>。  
 又客說之曰、「大風飄起、維屏以牆、斯足蔽矣。風其如牆何」<sup>e</sup>。  
 名之曰牆猫可」。又客說之曰、「維牆雖固、維鼠穴之牆斯圮矣」。

東里丈人嗤わらひ之曰「噫嘻ああ、捕フル鼠ヲ者ハ故もとヨリ猫也。猫即チ猫耳。胡ゾ為ラ自ラ」。

失ハシ本ヲ真哉ト。

(劉元卿『賢奕編』による)

注

○斎奄——人名。

○靄——もや。

○飄起——風が猛威をふるう」と。

○牆——塀。

○圮——くずれること。

○東里——地名。

○丈人——老人の尊称。

○嗤——嘲笑すること。

## 設問

(一) 傍線部 a・b・c を現代語訳せよ。

(二) 「名レ之曰ニ牆ニ可ク」(傍線部 d)と客が言つたのはなぜか、簡潔に説明せよ。

(三) 「牆又如レ鼠ホ何ハ」(傍線部 e)を平易な現代語に訳せ。

(四) 「東里丈人」(傍線部 f)の主張をわかりやすく説明せよ。

## 第四問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

住む所に多少の草木があつたのは、郊外の農村だつたからである。もちろん畑たんぼの作物があり、用水堀<sup>ぼり</sup>ぞいに雜木の藪<sup>やぶ</sup>もあり、植木屋の植溜<sup>うえだめ</sup>もいくつかあつたし、まだどこの家にもたいがい、なにがしか青いものが植えてあつた。子供たちはひとりでに、木や草に親しんでいた。

そういう土地柄のうえに、私のうちではもう少しよけいに自然と親しむように、親が世話をやいた。私は三人きょうだいだが、めいめいに木が与えられていた。不公平がないように、同じ種類の木を一本ずつ、これは誰のときめて植えてあつた。だから蜜柑<sup>みかん</sup>も三本、柿<sup>かき</sup>も三本、桜<sup>さくら</sup>も椿<sup>つばき</sup>も三本ずつあつて、持主がきまつっていた。持主は花も実も自由にしていいのだが、その代り害虫を注意すること、施肥をしてもらうとき、植木屋さんに札をいつておじぎすること等々を、いいつかつていた。敷地にゆとりがあつたから、こんなこともできたのだろうが、花の木実の木と、子供のよくように配慮して、関心をもたせるようにしたのだとおもう。

父はまた、木の葉のあてっこをさせた。木の葉をとつてきて、あてさせるのである。その葉がどの木のものか、はつきりおぼえさせるためだらう。姉はそれが得意だつた。枯れ葉になつて干からびていても、虫が巣にして筒のように巻きあげているのも、羽状複葉の一枚をとつてきたのでも、難なく当ててしまふ。まだ葉にひらいていない、かがまつた芽でさえ、ぴたりとあてた。私もいくつかは当てるができるのだが、干からびたのなどされると、つかえてしまう。そこを横から姉が、さつと答えて、父をよろこぼす。私はいい気持ではなかつた。姉のその高慢ちきがにくらしく、口惜<sup>くや</sup>しかつた。しかし、どうやつても私はかなわなかつた。そんなにくやしがるなら、自分もしつかり覚えればいいものを、そこが性格だらうか、どこか締りがゆるいとみえて、不確かになつこけた。これが出来のいい子と出来のわるい子との、別れ道だつた。

出来のいい姉を、父は文句なくよろこんで、次々にもつと教えようとした。姉にはそれが理解できるらしかったが、私はそこはいかなかつた。姉はいつも父と連立ち、妹はいつも置去りにされ、でも仕方がないから、うしろから一人でついていく。嫉妬の淋しさがあつた。一方はうまれつき聰いという恵まれた素質をもつ上に、教える人を喜ばせ、自分もたのしく和氣あいあいのうちに進歩する。一方は鈍いという負目をもつ上に、教える人をなげかせ、自分も樂しまず、ねたましさを味う。まことに仕方のない成りゆきである。環境も親のコーチも、草木へ縁をもつ切掛けではあるが、姉への嫉妬がその切掛けをより強くしているのだから、すくなくらず気がさす。

しかし、姉は早世した。のちに父は追憶して、あれには植物学をさせてやるつもりだつたのに、としばしば残念がつてこぼしていたところをみると、やはり相当の期待をもつていたことがわかるし、その子に死なれてしまつて氣の毒である。

出来が悪くても子は子である。姉がいなくなつたあとも、父は私にも弟にも、花の話木の話をしてくれた。教材は目の前にたくさんある。大根の花は白く咲くが、何日かたつうちに花びらの先はうす紫だの、うす紅だのに色がさす。みかんの花は匂いがいいばかりではない、花を裂いて、花底をなめてみれば、どんなにかぐわしい蜜を貯えていることか。あんずの花と桃の花はどこがちがうか。いぬえんじゅ、猫やなぎ、ねずみもち、なぜそんなこというのか知つてるか。蓮の花は咲くとき音がするといわれているが、嘘かほんとか、試してみる気はないか——そんなことをいわれると、私は夢中になつて早起きをした。私のきいた限りでは、花はポンなんていわなかつた。だが、音はした。こするような、ずれるような、かすかな音をきいた。あの花びらには、ややこわい縦の筋が立つていて、ごそっぽい触感がある。開くときそれがきしんで、ざらつくのだろうか。

ウ  
こういう指示は私には大へんおもしろかつた。うす紫に色をさした大根の花には、煙の隅のしいんとしたうら淋しさがあり、虻あぶのむらがる蜜柑の花には、元気にいきいきした氣分があり、蓮の花や月見草の咲くのには、息さえひそめてうつとりした。ぴたつと身に貼りつく感動である。興奮である。子供ながら、それが鬼ごっこや縄とびのおもしろさとは、全くちがうたちのものだとうことがわかつっていた。

ふじの花も印象ふかかつた。いつたいに蝶形の花ははなやかである。ましてそれが房になつて咲けば、また格別の魅力があ

る。子供たちが見逃すわけがない。ただこの花は取ることができにくかった。川べりの藪に這いかかっているのは危くてだめだし、野生のせいか花房も短い。庭のものは長い房で美しいが、勝手にとるわけにはいかない。そこで空家の軒とか、廃園の池とかの花の下を遊び場にする。私もそこへ行きたかつた。けれども父親からきびしく禁止されていた。そんな場所の藤棚は、一見なんでもなく見えて、実はもう腐れがきていることが多く、ひょっとした弾みに一度につぶれるから危険だ、という。ことに水の上へさし出して作った棚は、植木屋でさえ用心するくらいで、子供は絶対に一人で行つてはいけない、といい渡されていた。

荒れてはいるが留守番も置いて、門をしめている園があった。藤を藤をと私がせがむので父はそこへ連れていつてくれた。俗にひょうたん池と呼ばれる中ぐびれの池があつて、ぐびれの所に土橋がかかつていていた。だがかなり大きい池だし、植込みが茂つていて、瓢箪ひょうたんというより二つの池というような趣おもむきになつていた。藤棚は大きい池に大小二つ、小さい池に一つあつてその小さい池の花がひとつと勝れていた。紫が濃く、花が大きく、房も長かつた。棚はもう前のほうは崩れて、そこの部分の花は水にふれんばかりに、低く落ちこんで咲いていた。いまが盛りなのだが、すでに下り坂になつていて盛りだつたろうか。しきりに花が落ちた。ほとほと音をたてて落ちるのである。落ちたところから丸い水の輪が、ゆらゆらとひろがつたり、重なつて消えたりする。明るい陽ひがさし入つていて、そんな軽い水紋のゆらぎさえ照り返して、棚の花は絶えず水あかりをうけて、その美しさはない。沢山な虹たくさんが酔つて夢中なように飛び交う。羽根の音が高低なく一つになつていて、しばらく立つていると、花の匂いがもうつと流れてきた。誰もいなくて、陽と花と虹と水だけだった。虹の羽音と落花の音がきこえて、ほかに何の音もしなかつた。ぼんやりといふか、うつとりといふか、父と並んで無言で佇んでいた。たたず飽和ヒというのがあの状態のことか、と後に思ったのだが、別にどうということがあつたわけでもなく、ただ藤の花を見ていただけなのに、どうしてああも魅入られたようになつたのか、ふしぎな気がする。

(幸田文「藤」)

- (一) 「親が世話をやいた」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (二) 「嫉妬の淋しさ」(傍線部イ)とはどういったとか、説明せよ。
- (三) 「そういう指示は私には大へんおもしろかった」(傍線部ウ)とあるが、なぜおもしろかったのか、説明せよ。
- (四) 「飽和というのがあの状態のことか、と後に思った」(傍線部エ)とあるが、どう思ったのか、説明せよ。

草  
稿  
用  
紙

(切り離さないで用いよ。)